

箕面市小野原西地域の自然環境調査を通じた 仲間づくりと自然保護活動

みのお山自然の会

会長 本多 孝

大阪府

箕面市小野原西で区画整理事業が、進められています。箕面市の南東部に位置し、吹田市の千里北公園と隣接し、阪急の北千里にも近い所です。

この区画整理事業には、茨木市から箕面市船場、さらに豊中市へと繋がる都市計画道路が真中を通して、すでに開発されている小野原東と周回する道路が繋がります。

この小野原西は、まわりを都市住宅に囲まれています。南側は吹田市、東側は箕面市の小野原東、西側は、箕面市の阪急住宅、北側は、小野原の昔からの集落と国道以北は、住宅街が続きます。このように都市に囲まれたなかに、昔ながらの「里やま」の風景と豊かな自然環境を残した地域があります。

昔は、当たり前のようにこの風景は、どこまでも連なっていたのですが、今は、開発が進み小野原西だけが、ぽっこりと残りました。

箕面市内にも市街化調整区域がいくつかあり、街の中に田畑が広がる所がありますが、他の地域と小野原西のちがいは、小野原には、丘陵が3箇所あり、山あり、谷あり、溜池が沢山有ります。そして、田畑が小野原の集落の近くににあります。このように変化に富んだ、「里やま」の自然環境を有しています。

丘陵の特徴は、雑木林と社寺林が若干ありますが、多くは、竹やぶです。一般的に雑木林は、エネルギー需要が転換され、プロパンガスが一般的になってから、雑木林の手入れがされなくなったのに対して、この地域では、竹やぶが今もタケノコの産地として活用されています。

この自然環境は、箕面市の中でも山麓、山間部にはない身近な「里やま」の自然が広がっています。このような自然を後世に伝えて行く事は、まちづくりや地球環境保全の立場から大切だと考えました。

この区画整理事業のまちづくりの目標と基本方針について、1回目のレクチャーの際（6月13日）に箕面市都市整備課から説明がありました。

1. 緑を活かした表情豊かなまちづくり
2. 安全で快適なまちづくり
3. 地区計画による良好なまちづくり

の以上をコンセプトに「表情豊かな街のにぎわいと緑と水の自然環境が共存する魅力的なまちづくりを進めます」と進めてこられました。

また、箕面市には、まちづくり理念条例があり、地球環境や自然環境に配慮したまちづくりをして行くために自然環境調査を行う事が大切だと考えました。

この地域では、1993年8月に小野原西区画整理推進協議会が結成され、地元と意見調整や合意形成が進められており、現段階で、自然環境を保全し、自然を後世に伝えていくための仕組みづくりの取り組みの一つとして取り組むことになりました。

この地域は、原生的な自然でなく人と自然の多様で豊かな関わりの中で維持されてきた自然環境である事を念頭に置いてすすめる事としました。

この取り組みに際して、自然環境を市民が担当行政である都市整備課の協力を得て調査し、その結果を小野原西のまちづくりに活かして行くこと

ができるようにしていくことを目的にはじめました。

ここに一年間のまとめをし、報告するものです。

この調査の中で、感じたことがいくつかあります。

1つに自然環境を残すと言うことは、ただ単に自然が素敵だ、良いと言うことだけでなく、地球環境を保全し、次の世代に自然をより良くして伝える事が世界的に求められている事であり、開発業者や開発推進派、行政の開発部局、市民や自然保護団体がむやみに対立する事ではなく、お互いに共通する未来に向かって力や知恵を合わせる必要が有る事、そして、経済優先から環境優先の社会に仕組みやシステムを変えていく事が求められていると思います。それをボトムアップで地域から作り上げていく事ではないかと感じました。

2つに、まちづくりに大切な事として、その土地を守ってきた、地権者や地元の人たちの歴史や文化を新しい住民と共有することの出来るエコミュージアムの理念に基づいた仕掛けが出来る土台を設計上のハードに組入れることが出来るのか。たとえば公共用地内にその仕掛けが出来る部分・場所があるのか。また、そのような制度を行政の中に作る必要があるのではないか。

3つめに、まちづくりというハードだけでなく人と自然とうまく付き合えるように環境教育を広げていく人材養成は、別の意味でも大切ではないかとおもいます。自然は良いが、「カエル、セミがうるさいからなんとかしろ!」、近くに自然があると落ち葉や落ち枝が困る、蚊やハエが困る、切つてしまえと自然環境は、暮らしの厄介ものになってしまうか。

ヒメボタルは良いがそのほかはダメと言うようなご都合主義では、自然環境と共存できません。これらは、一つの生態系を作っており、人間にとって残したいものもムカデやヘビなどいやなものも

セットになっているということを理解する必要があります。そのような自然環境教育を進める事は、とても大切です。

また、散歩してもごみは捨てる、作物や草花をとる等「ええとこどり」はしていないだろうか。

4つに、里やまのように人と自然が関わって成り立ってきた自然環境は、開発を止めれば残せると言うものではなく、仕組みを考えて行かないと人が関わりつづけて、今の自然環境を残しつづけることはできないということ。その仕組みや仕掛けを考える事が行政にも将来求められる事ではないか。

5つに、まちづくりには、以上に上げたように様々な部局が関わって成り立つものであり、都市整備課だけの問題ではないのではないかと思います。

6つに、出来る限り最大限、今の自然環境をそのまま残す部分を作ると共に、一度地表をはがしたとしても出来るだけ元の自然環境を復元する事を心がける設計が必要ではないか。たとえば、溜池の土手は、今のように草花の生える現状のものを復元する。溜池は、野鳥や渡り鳥が飛来できるように片隅に浅瀬やアシが生え木が覆うような環境を作るとか、補場整備された田畑には、畔や道ばたに草花が生息できる場所があれば昆虫たちも生息できます。

また、極端な段差を作ったり、石垣により隔離されるような状況を極力作らない。

また、草花が生い茂っても道がふさがらないように木道を付けるとか、墓地や緑の回廊には、今の小野原に生息している木々の種類を取り入れるなどが大切ではないか。

小さな溜池が沢山ありましたが、トンボやカエルが生息できる池を作る事も必要かもしれません。

小野原西の自然環境は、昔は、ありふれた、当たり前のものだったのが、今やここにしかない物になってしまいました。メダカやタガメのような

当たり前なのが今、絶滅の危機に瀕している事を思うと小野原西の自然環境は、絶対に無くしたくない自然環境です。しかし今の社会には、地元の人々の暮らしとかかわって、このような自然環境を次の世代に残していく仕組みがないのが今の経済優先社会の最大の問題点のように思います。

「自然を大切に」という掛け声だけでなく、自然を次の世代に伝える制度や社会を国や地方自治体につくっていく事と、自然と触れ合う機会を増やして、自然環境に理解ある人々の「心づくり」が大切だと思いました。そのための人材養成は、急務だと考えます。

最後に、この調査に講師協力下さいました、井上昇吾、今井信五、大森 純、河合正人、後藤裕美、曾根康男、田中英俊、布谷知夫の各氏、スタッフとして奮闘下さいました大浜光央、木多道宏、北川照子、後藤誠二郎、中島貴子、本多正恵、増田京子の各氏、小野原西の自然観察会を独自に開催して下さいましたNACS-J自然観察指導員大阪連絡会の皆様、行政として休日にもかかわらず協力・懇談下さいました箕面市都市整備課の職員の皆様に感謝致しますと共に記してお礼申し上げます。



